事業報告

子ども発達支援室 2015 年度事業報告

1．はじめに

子ども発達支援室の主たる業務は，関係諸機関との連携にもとづく地域支援である．具体的に 2015 年度に実施した業務はメンタルフレンド派遣事業，特別支援ボランティア派遣事業の 2 つである．これらの派遣事業では，多くの学生がボランティアとして，適応指導教室や小学校での支援に直接かかわっている．ボランティア学生へのきめ細かなサポートや関係諸機関との密な連絡が必要とされ，充実に努めているが，限られた勤務日での対応の難しさもある．

以下に，2015 年度の各事業の内容及び課題について報告する．

2．メンタルフレンドの派遣

1996 年度から制度化された，不登校等児童に対する本学のメンタルフレンド派遣事業は，2015 年度で 20 年目を迎えた．子ども発達支援室における派遣は，2009 年度をもって家庭への個別派遣を終了し，2010 年度より地域の適応指導教室等における集団活動への派遣と一本化された．

2015 年度の主な派遣先は，引き続き依頼のあった，武豊町適応指導教室，半田市適応指導教室，本学付属高校の 3 か所であった．

a．事業内容

学生への募集は，4 月に学内の掲示板や講義などを通して呼びかけ，5 月にはメンタルフレンド活動への理解を深めてもらえるよう「登録前の事前研修会」を 2 回行った（登録希望者はどちらか 1 回に参加）．事前研修会では，2008 年度から各適応指導教室の先生にお越しいただいており，教室の雰囲気，活動に求めることなどをお話してもらっている．このような募集を通して，合計 42 名（男子学生 6 名，女子学生 36 名）の学生が登録した．

登録をした学生には，研究員がまず個人面接を行った．個人面接では，学生それぞれの個性を知るとともに，活動可能な時間，希望する活動形態などを確認した．更に，YG 性格検査を実施し，より学生の個性を理解するよう努めた．これらの情報と，派遣先の特徴や要望とのマッチングを行い，派遣先を決定した．

2015 年度の派遣状況を表 1 に示す．派遣した学生は合計 16 名（武豊町適応指導教室には 3 名，半田市適応指導教室には 9 名，付属高校へは 4 名）であった．2014 年度まで派遣をしていた美浜町適応指導教室は，利用する生徒が不定期であったことが理由で，メンタルフレンド派遣は依頼を受けなかった．

それぞれの活動回数については表 2 に示すとおりである．

活動は基本的に毎週もしくは隔週のペースで，同じ曜日・時間帯に行った．活動を開始した学生には，活動日ごとの報告書の作成，更に定期的な（活動頻度にもよるが月に一回程度）個別のスーパービジョン（以下 SV）を受けることを義務付けた．SV では，報告書をもとに活動を振り返り，学生が感じる疑問や不安，気づきについて話し合い，指導を行った．2 月には，「活動報告会」を開催し，活動する学生同士の体験からの学び合いを目指した意見交換を行った．

また，派遣先との連携を図るため，4 月には，各適応指導教室の先生方に本学までお越しいただき，派遣人数

表 1　2015 年度メンタルフレンド派遣状況

派　遣　先	派遣人数
武豊町適応指導教室（武豊町字砂川）	3（女 3）
半田市適応指導教室（半田市桐ヶ丘）	9（男 3 女 6）
付属高校　学習室	4（男 1 女 3）
派遣学生合計	16

＊登録者数 42 名

表 2　2015 年度メンタルフレンド活動回数

派遣先	活　動　回　数　(のべ)												
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
武　豊	—	3	7	2	0	4	5	6	5	1	4	1	38
半　田	—	6	7	4	0	5	13	8	3	3	6	1	56
付　属	—	—	—	—	—	2	11	3	6	6	7	1	36
合　計	0	9	14	6	0	11	29	17	14	10	17	3	130

や活動内容等の要望をお伺いし，意見交換を行った．

11 月には，教員および研究員が各適応指導教室へ訪問し，教室内の子どもたちの状況や学生の活動の様子を現場の先生方からお聞きした．

b．振り返りと今後の課題

2015 年度も，42 名という多くの学生が，メンタルフレンドの活動に興味を持ち，登録を行った．そのうち派遣された学生は，16 名であったが，スケジュール等の都合で活動のチャンスを得られなかった学生にも，活動報告会の参加を呼び掛けるなど，学びの機会を提供した．

派遣の開始時期については，これまでも各教室の状況を伺いながら，調整を行ってきた（表 2）．

2014 年度に引き続き，派遣の開始時期を，継続と新規の 2 段階に分け，継続学生には，5 月から活動を始めた．美浜町適応指導教室では，利用する生徒が不定期にしか通えない状況であったため，状況に応じて登録者から活動してもらう予定であったが，活動依頼を受けないまま年度末を迎えた．今後も派遣の調整を柔軟に行えるよう工夫していきたい．

学生たちは，教室の先生方とよく話をし，また SV で状況や感情を整理しながら，子どもへの理解を深めた．付属高校では，学習室利用生徒が少ない中でも，メンタルフレンドがその場に居続けることで，次第に心を開いて話をし始める生徒がいたことは，高校側から良い評価のお言葉をいただくことにつながった．半田市適応指導教室では，教室の先生方に，メンタルフレンド学生を温かい目でご指導いただき，学生自身の育ちを支えていただいた．武豊町適応指導教室では，女子生徒の利用が多かったことと，派遣学生が全員女子学生であったことが，よいマッチングとなった．

SV では，「メンタルフレンドとして何ができるか」に一生懸命になりがちな学生に対し，何かしてあげようとするより，安心してそこに居られるような関わりを重視できるよう指導を行った．同じ空間に居ても話の輪に入ってこようとしない生徒にも，心を配り，一人で居る生徒にも肯定的なまなざしで見守ることの大切さを，実践しながら学ぶ機会となった．子どもたちへの支援だけではなく，学生の成長のためにも，SV を受ける目的や意味をしっかり伝えていきたい．

派遣先の先生方には，学生の活動はもとより，生活や進路のことまで大変温かく見守っていただき，2015 年度の活動にも概ね肯定的な評価をいただいたように感じる．教室の先生方からは「若い学生さんは，生徒たちにとって，私たち教員より話しやすく近い存在で，居てもらえると有難い」とのお言葉をいただいた．また，メンタルフレンドを派遣している他の適応指導教室との情報交換を通じて，学生の活用上の良い点を取り入れていきたいといったお話を聞くこともできた．

今後も，教室に通う子どもたちへの間接的支援と，学生の成長の両方を視野に，研究員として学生へのサポートをしていきたい．

3．特別支援教育ボランティアの派遣

本事業は，何らかの配慮やサポートが必要な児童のいるクラスへ，学生ボランティア，いわゆる特別支援「学生」支援員を派遣するものである．2008 年度から半田市教育委員会との協議の上試行され，2009 年度より正式に開始されたものであり，今年度で 7 年目を迎えた．2015 年度の主な派遣先は，引き続き依頼のあった，亀崎小学校，雁宿小学校，宮池小学校と，新たに派遣を開始した半田小学校の 4 校であった．各小学校のニーズと学生の意向を考慮していただいた結果，4 校すべての小学校の特別支援学級への派遣となった．

a．事業内容

学生への募集は，メンタルフレンドと同様，4 月に学内の掲示板や講義を通して行い，5 月には，活動への理解を深めてもらえるよう「登録前の事前研修会」を開催した．

このような募集により合計 20 名（男子学生 3 名，女子学生 17 名）の学生が登録を行った．学生の講義等スケジュールを検討した結果，派遣に繋がったのは 16 名であった．派遣状況の詳細は表 3 に示すとおりである．

表 3　2015 年度特別支援教育ボランティア派遣状況

派 遣 先	派　遣　人　数
亀崎小学校	4（男 0 女 4）
雁宿小学校	4（男 0 女 4）
半田小学校	4（男 0 女 4）
宮池小学校	5（男 1 女 4）
派遣学生合計	17

＊登録者数 20 名

活動は基本的に，同じ曜日・時間帯に毎週行った．活動を開始した学生には，メンタルフレンドと同様，活動ごとの報告書の提出と，定期的な SV（活動頻度にもよるが月に 1 回程度）を義務付け，学生の活動状況の把握やサポートを行った．

また，2 月には「活動報告会」を行い，支援の必要な子どもに対する理解を深めたり，学生の不安や疑問を話し合ったりする場とした．同じ活動場所でも，普段は顔を合わせる機会がないので，学生同士で率直な意見交換ができる貴重な機会となった．

新年度から派遣先との連携を図るため，4 月には，半田市内の小学校において，派遣先小学校の担当者，教育委員会担当者，子ども発達支援室の担当者の顔合わせを含めた打ち合せを実施した．この打ち合わせは 2011 年度からの試みである．派遣人数や活動内容など各小学校の要望をお伺いし，研究員からは，本事業の目的，また配慮をお願いしたい点について確認をした．

また，研究員が後期に 1 回，各小学校を訪問し，学生の活動の様子，対象となる児童の様子を伺い，問題点や改善点についてご相談させていただいた．半田市が独自に派遣を行っているボランティア事業との兼ね合いで，本支援室からの派遣学生の目的や要望を再確認していただく場となった．本事業は地域支援という目的で派遣を行なっており，派遣学生の中には必ずしも教員を志望しているものばかりでなく，社会福祉に貢献する職業を目指しているものもいることについて説明し，小学校内で児童との継続的な関わりが持てるような活動となるよう，お伝えした．

b．振り返りと今後の課題

学生の活動に対して，今年度も概ね肯定的な評価をいただいた．小学校の先生方には，学生の熱意を温かく見守っていただき，現場の先生方のご指導の仕方を見せていただくことで多くの学びの機会をいただいた．

前年度，各小学校へ配慮をお願いした以下の 3 点については，引き続きお願いをした．

①　学生のクラスへの配置ついて

特別支援教育ボランティアとして，児童への理解を深めていくには，対象児童への継続的な関わりが望まれるため，できるだけ同じクラス，同じ児童を担当できるようにしていただく．

②　担任の先生に学生が質問する時間の確保

学生にとって，わからないことやとまどったことが多くある中，担任の先生にお尋ねしたいがその時間がなかなか取れないのが現状である．その日のうちに質問できなかった時は，後日改めて先生のご都合を聞いてお尋ねするなど，工夫が必要である．

③　担任の先生が不在の時の活動について

特別支援教育ボランティアは，教員養成のためのインターンシップとは異なる目的で行う活動である．そのため，先生が不在な中で長時間クラスを任されるような場面は，学生に責任を負いきれない可能性がある．児童の安全も考え，必ず先生の監督の元で活動ができるようお願いする．

以上の点については，特別支援コーディネート担当の先生の異動などがあるため，4 月の打合せ会で，共通認識を持つことが今後も必要であると考えている．また，コーディネーターの先生だけでなく担任の先生にも周知されているかどうかはその都度確認する必要があると感じた．今後も，このような年度ごとの働きかけは続けていきたい．

2015 年度は，年度の途中で活動を続けられなくなった学生が 3 名いた，理由としては，インターンシップや実習等で時間のゆとりが持てなくなったことや家庭の事情等であった．中には，子ども発達支援室と連絡が取れ

なくなった学生もあり，ガイダンス研修会や SV で伝えてきている必要最低限のルールを再度周知する必要性を感じた．

継続して活動を続ける学生の中には，実習や就職活動などで，活動の頻度や時間帯を少なくしなければならないケースも少なくなかった．そのような場合でも，小学校の先生方には快く対応をしていただき，午前のみあるいは午後のみボランティア活動をする学生も受け入れていただいている．

活動学生の SV において，「実習等で行けない日が続き，久しぶりの活動となっても，子どもたちが自分のことを覚えてくれていて嬉しかった」，「情緒不安になっている子どもへこまめに声をかけ続け，3 年目でやっと心を許してくれるようになった」などの感想を聞き，継続することの難しさと，そこから学ぶ貴重な気づきがあることを実感している．

達成感は継続的な支援の先にあるものであり，試行錯誤すること自体が活動である．今後も，学生の理想と現実の間の揺らぎをフォローしつつ，不全感や不安感とも向き合えるようサポートを続けていきたい．また，学生が自分の限界を感じて，やむを得ず活動を辞退することになっても，誠意ある対応ができるような指導を心がけたい．

〈2015 年度　子ども発達支援室構成員〉

子ども発達支援室長	堀　美和子（子ども発達学部）
運営委員	柏倉　秀克（社会福祉学部）
	堀場　純矢（社会福祉学部）
	瀬地山葉矢（子ども発達学部）
研究員	河合　裕子
	新美　都子（2015 年 8 月末まで）
	伊藤奈津子（2015 年 9 月 1 日から）